

安岡学管見

——立命の人間学——

木 立 雅 憲

数年前、ふとした縁で、今は亡き安岡正篤氏の著書に出会い、竊かに私淑するに至った。以来、折に触れ繙き、繰り返しては読むうちに、いつの間にか四十冊余りを数えるほどになったが、昭和五十八年十二月の逝去（享年八十四歳）後五年を経て、今尚、生前の講演や筆録の類が新たに編まれたり、復刻が行われている有様で、それらの応待に忙しく、纏まった全体像を確立し得ぬままに締切も過ぎ、督促に追われるような仕儀に立ち至ってしまった。幼少より近代では異例の徹底した漢学教育を受け、若くして陽明学の体現者として令名を謳われ、一学究、一教育者の域をはるかに超えた幅広く深沈な影響力を政財界はじめ各方面に及ぼし続けた一代の碩学について、筆者のような浅学菲才の門外漢が言辞を弄せんとすることは、正に盲蛇に怖じずの嘲りを招く挙であることはもとより重々承知の上である。しかし敢えて紹介の小論に筆を染めようと思いついたのは、ほかでもない、久しく痛感してきた、自らとその時代の教育の不完全・根本的欠陥のよって来たる背景とその打開策について、安岡氏によつてはじめて、我々の歴史と伝統の本源に返るといふかたちで模範的な説明を与えられたことに對する感謝の念からである。

以下、多分に雑駁且つ偏頗のきらいは免れ難いが、筆者の注意を惹かれるままに、安岡正篤の人と学問と経歴の一端を紹介してみたい。稀購書が少なくないことを考慮して引用を多くしたが、しかし所詮それは筆者の力量と咀嚼の不十分の故と寛恕されたい。尚、引用に際しては、仮名遣い等、表記

を一部現代風に改めたことをお断りしておく。

安岡氏の著書に親しむようになって間もなく目にとまったのは、若き日の力作『王陽明研究』（大正十一年初版）の新序（昭和三十五年）の次の一節であった。

大学時代棄身になってよく学問したが、その頃から私は一面強烈に革命を考えるようになった。しかし東洋先哲の学問の力であろう。今日の学生のように浅薄皮相な集団活動に趨らず、まず深い政治哲学を持った優れた同志の糾合を考えた。それが私の社会生活を築きあげる不思議な原動力になってしまった。当時第一次大戦の後で、社会的思想的混乱が甚だしく、共産主義革命思想運動も、正直で強烈であつたが、それに対して勃然として民族主義に立つ昭和維新運動が始まつた。私はいつのまにかその激流の中にあつた。しかし私はまた次第にそれらの思想・運動の浅薄さ、躁しさ、矯激性などにうんざりして、専ら講学と青年子弟の養成に深入りしていった。

一読して、思わずプラトンの政治から哲学への転向を述懐した第七書簡を想い浮べた人も少なくないであろう。事実、最近になって、『童心残筆』中の「白蓮青松何処に在りや」と題する、当時の政治的宗教的指導者達を批判した痛烈なる論稿（大正十年頃）に、次のような一文を発見した。

プラトーンが其の理想の国家に於て「哲人が出でて国家の君主とならぬかぎり、若しくは所謂現在の君主者が真に深く哲学を修めぬかぎり、民衆は天日の光を見ることが出来ないであろう」と言つた其の確信は同じく、我等民族を徹頭徹尾貫いた信念である。

哲人が民衆の指導者でなければならぬ。少くとも指導者たるものは哲学を修めなければならぬ。我等祖先の語を用いて言えば道を修めなければならぬ。勿論其の場合プラトーンの哲学は決して今日言うが如き狭義の哲学を指すものでないと同じく、学の一字も概念の体系を意味するのでは

無い。学とは平たく言えば、真実の人間に為ること、自己を完成すること、人格を高めることである。今の指導者階級に親しい孟軻の言を借りて言えば、学問の要は放心を収めるに在る。放心とは人格の不統一である。しっかりと自己を擲んで居らぬことである。自己に随って生きず、外物に牽かれて生活する空虚な散漫な状態である。かかる空虚な我の状態を改造して、先ず天地の間に独立独歩する自己を造ること、此れを指導者たる者は所謂造次にも顛沛にも忘れてはならない。(一九六、七頁)

無論、これをもってプラトーンの思想的影響を直接見ることは恐らく無理であろう。むしろ、プラトーンに対する氏の言及は意外なほど稀で、筆者の知る限りで注目すべきものは、『易学入門』にその数理的世界観が近代の科学技術文明を生み出す思想的源泉となっているという指摘があるにすぎない。しかし、最初に引用したような、同士の糾合による社会革新に論及する場合には、度々A・カレル等現代思想家の発言を引用している(『大和―自然と人間の大則―』二三頁他) ことなどから見ても少なくとも広義のプラトニズムとも言うべきものの間接的反映を読みとってあながち間違いではないと思われる。

しかし、先の引用文の学問観が東洋の学的伝統に立脚していることは紛れもない事実であって、「放心」に関連して、同じ頃書かれた『王陽明研究』の「大学論」の、

……国家が頽廃しているならば、その国民たるものは是非ともこれを有道に改革しなければならぬ。それは国民がひとしく分相應に改革に参加することによって行われる。改革とか革命というようなことは、決して少数者によってその設計通りにゆくものではない。必ず国民精神の高潮に棹さねばならぬ。国民の道徳的自覚を根底とせねばならぬ。

畢竟、あらゆる方面において放心の状態にあるのである。魂を喪っていかに生活制度を論じて

も決して成功するはずはない。一切のアプリオリとして、超越的条件として、まず我々は放心を収めねばならぬ。放心を収めて始めて自己及び世界を確立することができる。社会の進歩は民人の「尽心」に比例するものである。

この意味における自覚を、我々は少年の時より四書、なかならず大学によって、最も明切簡勁に教えられてきている。(二三二頁)

とか同書「解嘲」の、

……人間は常に自己を欺いてはならぬ。「誠」とは他に対していう意味ではない。みずから欺かぬ謂である。我が我を知る意味である。故に中庸に「これを誠にするは人の道なり」と自覚を説いている。大学に「慎独」を説くは最も純粹である。東洋に哲学なしというが、所謂哲学の意義が違ふ。哲学の究竟には東洋に深い造詣がある。これを思う時、却って今日のような哲学に断じて満足することができない。(二二六頁)

といった記述によって、「小学」的徳性の涵養を不問に付して抽象的概念的に偏した西洋近代の学に対する不満と、東洋の伝統的学風と教育に対する氏の強い自負を知ることができる。畢竟、幼少の頃から叩き込まれた、当時(日露戦争の前後から大正にかけて)にあっても「全く真実とは思われぬほど時代錯誤的な」徹底した「漢学教育」によって培われた学問が、安岡氏のあらゆる活動や批判の根柢にあるといえよう。

そこで先ず、安岡氏の学問の到達点ともいうべきものの輪郭を、後年の諸作の渉獵によって、何とか臆気にも素描してみなければならぬ。文体の不統一は容赦願いたい。

氏によると、

宇宙人生は一者(絶対者)の限りなき分化発展(『大和』一五六頁)

であり、しかも、

陰陽相對（待）的原理ともいふべきものによって成立活動している。（同上 一五七頁）
つまり、

陽の働き即ち発現分化の働きがあると、必ずこれに即してその分化をその俚に……統一含蓄しようとする、いわば全体性及び永遠性を司どる働きがある。……陰の原理である。（同上 一五七頁）

この陰陽活動の根本が太極であります。太極とは、宇宙そのものの造化そのものでありまして、この太極の作用働きが、陰陽相對（待）性理法であります。（『易と人生哲学』九一頁）

その陰陽を正しく活用する、発展させるのがすなわち中であります。（同上 九九頁）

……相對しつつ相待って無限に矛盾を統一して進歩向上していく働き、これが本当の中であります。その相對（待）性原理、原則というものが陰陽であります。そしてその無限の進行が易であり、易学の要約であります。（同上 八六頁）

易は、限りなき造化、つまり生命というものを把握して、その中に含まれておる数、複雑微妙な因果関係を明らかにして、どこまでも進歩向上発展（Ⅱ中）にもっていくことであります。（同上 六一頁）

そしてこの易の理法を『老子』の根本にも見て、一見プラトン哲学の核心の解説と錯覚を起こせるような表現で、次のように述べている。

道は絶対者であるから、相對界の「多」に即していえば「一」ということもできる。万物が存在活動し得る所以は「一」に依つてである。即ち「一」があらゆる存在に万物に内在することに依つて始めて万物が存在することができるものである。しかし如何なる存在も「一」そのものではない。もし「一」そのものであるならば万物はみな同一物となり、一切無差別と化し、「一」は

「一」でなくて「多」と化してしまう。「一」は万物に内在すると共に万物を超越して、それ自体増しも減りもせぬ。万物は「一」を分有して、全体生命より個体生命を発生する。その創造の触発性を「機」という。万物みな機より出でて機に入るのである。（『老莊思想』四四～五頁）従って、氏は次のように断言する。

この中庸、老子、易というものは一連のもので、皆相待って東洋哲学の大事な中核をなしております。（『易と人生哲学』八七頁）
そして、畢竟

東洋の学問は創造の根本に復ることを力説しておる。論語に「君子はその本を務む」といっており、孟子にも「その大なる者を立つ」と説いている。それが陽明学の精神にもなっている。

（中略）……凡ての教、殊に日本の惟神（かんながら）の教というものは、その点において最も純真正大に根本に返って、そうして全く小我を排脱して、自然と人間との大和に生きようとするものなのである。（『大和』一九二～四頁）

かくて以上のような見地に立って、以下のような文明批評が生まれることになる。

世界にこういう相待的原理があつて大和しており、その分化発現随って往々未梢化殺那的存在化する性向を西洋文化が代表し、統一含蓄、全体性と永遠性、それと共に停滞休止性を東洋文化が代表し、たまたま時命によつてヨーロッパの方がその本分に偏し過ぎた結果、だんだん深刻に生命を傷い、どうしてもこの俤では破滅より外ないというので、今や頻りに自然と人間との大和に返ろうとしているのである。

日本の方では混沌で来たところ、そこに突然西洋の本領を遺憾なく発揮した文化を急激に体験して、非常に刺激が強かった。その結果文化というものはヨーロッパに限るといふように錯覚し、

又ヨーロッパ人もそう論ずる。そういう所から自分の本領を忘れて追隨して往った。それが丁度前車の覆轍で、驚いてまた自らの本領に帰ろうとしている。その混乱が丁度今日の情勢である。あまりに主知的に功利的に、物質的に走り過ぎてゐる。それを中和しなければならぬ。そういうことを考えて来ると、我々の新しい世界文明というものは、丁度我々が本領として持つておる精神・能力、それを根柢として、それに今まで發展して来た西洋の文化、彼等の本領を接木して、初めて全きものになるということを知るのである。そうすると世界文明というものの創造に我々の占むべき地位・立場・使命がはつきりする。人類文化の大和的關係を知って、始めて真劍に自己の使命に生きることが出来る。そこに矛盾も排擠もないのである。（『大和』二〇〇〜一頁）

尤も、西洋文明の宗教的・哲学的背景について深い研鑽を積んだ人々の目には、これもまた「中和」を得ぬ一つの極論と映るかも知れないが、今は批評を差し置く。

ともあれ、人生を造化の一部と捉え、自然と人生の本来の意義を把握して、自分の存在と生活を維新してゆこうという易学こそ学問の真髓であり、東洋学の究極であるとする氏は、当然また「立命」ということを極めて重視する。

「命」は絶対的な働きであるけれども、その中には複雑きわまりない因果關係がある。その因果律を探って、それによって因果の關係を操作して新しく運命を創造變化させてゆく——これを「立命」という。「物」についてそれを行うのが「科学」である。（『運命を創る』巻頭言）

しかし単なる物の命と数とを研究する自然科学的研究さえ容易でないのに、まして複雑靈妙な人物や社会の命数の研究即ち哲学的或いは道学的研究は実に至難である。（『老莊思想』五九頁）

しかし、立命の原理である易学は、運命觀を宿命觀に陥れないで、よく運命の中に含まれておる思想的、実践的な意義……この義

命を明らかにして、常に自分が主体となって運命を打開していく。（『易と人生哲学』二二三頁）
そしてまた、人間を観察したり、指導したり、人物を養成する源泉にもなるという意味で、易学というものは、人間学、東洋人物学であると看破している。

そこでこの易を研究してまいりますと、円転滑脱というか、無限、無窮、実によくできておりまして、さすが何千年もかけて練り上げられたものであるということが、しみじみわかると同時に、易を学びますと、軽薄にのぼせ上ったり、あるいは意気地なく失望落胆することがなくなります。

また変化極まりない人間学と、自然の観察に基づく人間の考察、解明でありますから、易を学ぶことによって初めてわれわれは、限らない自由を得ることができる。（同上 一六二頁）
…… 私達の人生も、事業も、民族も国家も、これは大いなる易でありますから何にでも通ずることの上ない学問であります。（同上 一六四頁）

…… トインビーが、図らずもこの東洋の易というものを発見して、易の六十四卦循環の理を知るに及んで、初めて活眼を開くことができた、非常に感激をもって語っておりますが、われわれも真剣に易学をやりますと窮するということがない、本当に救われるというか、浮かばれるというか、意義深いと同時に非常に楽しい学問であります。（同上 一六四、五頁）

ところで、安岡氏自身は、自らの命数について、早くから如何なる認識をもっていたか。『童心残筆』に「竹院」と題する、昭和八年、三十五歳の述懐がある。

…… 命と数とに恵まれねば浮世の仕事に成功は出来ません。…… 早く命と数との己に非なるを知れば退いて「独」の道を行かねばなりません。…… 静かに私の命数の理を省察して見ますと、到底私にそんなことは許されていません。…… 私なんぞは将来日本革新の大業に当るべき人々

の為に、その心田を養う肥料位になる意味で、大いに先哲の学を興し、独り竊に樂む所を持たねばならぬと思つてゐるのです。志を抱いて世に恵まれぬ若者の善い友になつて終りたいと思つてゐるのです。……こういうことは東洋先哲の書に依らねばしみじみ感ぜられませんね。(一六三頁)

そして同じ小論の中で、時代のいわば命数について、こう語つてゐる。

日本は眼前一大改革の機運が迫つて居る。否己に鮮血が流れ、叫喚が聞えて居る。然し滅多には言えぬことだが、経国済民という目的からいうと、將に行われんとする維新改革は余程道から遠いのではないかと思ふのです。建武の中興……の轍を踏むのではないかと憂うのです。第一人材に乏しい。第二に国民に唯物享樂主義が浸潤して、道義が廃頽して居る。明治維新の成功には何と言つても幕府三百年武士道の養いがあります。……悲しいかな明治以来機械文明の輸入と唯物主義の跋扈の為に、国民に人物の試練が積まれて来て居りません。それだから果してどれ程のことが出来るか疑問ですね。私は日本現下の紛乱に當つて、一番大切な問題は、眼前の政策でもない、マルクス狩りでもない。風俗を正して、道義の觀念をうんと鼓吹すること、復び聖賢の学を新しく興すことであると思ふのです。(一五九―一六〇頁)

かくて、政治の根本は教育にあり、社会の改良は指導層の精神革命・自己変革に俟たねばならぬという信念のもとに、同志を募り、独自の教化事業を推進してゆくことになるのである。その際、後年の談話によれば、

自分は子供のときから育つてきた日本の歴史的・伝統的な教養にもとづいて東洋文化の真髓を究明する、日本民族の本質を解明する、これを目的にして同志が切磋琢磨するために東洋思想研究所、金雞学院、あるいは農士学校、篤農協会というようなものをだんだん經營し發展させてきたのです。(「師と友」三十四年)

と述懐しているが、若干補足すると、東洋思想研究所開設の翌大正十二年、北一輝、大川周明らと共に社会教育研究所を創設して青年学徒の養成に着手していたが、やがて彼らと袂を分かつて、金雞学院を設立したのが昭和二年、「昭和の松下村塾」として大きな反響を呼び、後年「ぼくが金雞学院を作らなかつたら歴史はどうなっていたかわからない」とまで述懐したことがあるという（柳橋由雄「日本農士学校の変遷」による）。血気に逸る青年達に暴力革命の無意味なる所以を論し、

……天下を救うのは一朝一夕で出来ない。幾段にも構成せられた人材陣が必要であり、また出来るだけ精透な時務眼と更に厳肅な徳操もなければならぬ。……出でて蒼生を誤まる自任的英雄が如何に多いことか。それを思えば青年は先ず修養して、軽挙するな……（『童心残筆』『看護』）と切論し、多くの若者を制して過激な行動に走るのを思い止まらせるのに努めた。にも拘らず、昭和七年の血盟団事件の関係者には、かつて院生だった者や学院出入者も少なくなく、各方面に物議を醸したこともあったほどだったのである。

他方、打ち続く不況に加えて世界大恐慌が波及し、農村が深刻な打撃を受け惨状を呈するなかで、昭和六年、農村が動揺すると国も危ういという考えから、日本農士学校を創立した。（紙数が許せば、末尾にその「学道箴規」を掲げたい。）

戦後になって、師友協会を組織し（二十四年）、郷学振興運動を推進した直接の背景は、アメリカの占領政策、氏のいわゆる3R・3D・3Sの日本弱体化政策の教育にまで及んだ忌まわしい影響と、これに便乗したいいわゆる進歩的日本人のあまりにも恥知らずで軽薄な反応に対する憂慮にあったが、安岡氏自身の意識においても、その教育内容においても、戦後と戦前に断絶は些かもなく、大正末年から一貫した道を歩んできたのである。（前掲座談、山口勝朗氏の『人間学のすすめ』編集後記参照）

いよいよ紙数も余すところ僅かとなったので、最後に、安岡氏の教育のいくつかの側面と陽明学との関係について、筆者の印象の輪郭を述べて締め括りたい。

氏は教育を論ずる場合、決まって人間の要素を性格や徳性と能力と行儀（儀・慣習）との三分、或いは本質的要素（徳性と習慣）と付属的要素（知能・技能等）との区分に基づいて、各々の要素に対して然るべき時期に然るべき訓育・修練を施しつつ、あくまでも徳性教育・人格形成を主として、功利的な単なる知識技術教育に偏しないこと、そして「何時どんな処に置いても必ず人から尊重せられ、どんな仕事にも謙虚に且つ敏活に習熟できるような心がけの人物を養成すること」を教育の本旨と考えている。またその人間形成の過程で、処女作『支那思想と人物』でも、

師と父母とは、人間に最も尊い二つのものである。そして人格を充実して完成せしめる点において、師は父母よりもさらに大なる意義と職分とを有する。

と指摘し、「敬」や「誠」を教育の基礎として極めて重視していることは、次に述べる「小学」の重視と並んで、氏を教条主義的な陽明学者の如く想像するのは不当な俗解に過ぎぬことを示すものと云えよう。

ところで、安岡教学の内容において著しい特色は「小学」の重視と「初学入徳の門」としての「大学」等による「立志」の重要性の強調にあると思われる。朱子の「小学書題」に、

古は小学・人を教うるに、灑掃・應對・進退の節、親を愛し長を敬し師を尊つとび友に親しむの道を以てす。皆、修身・齐家・治国・平天下の本たる所以にして、而て必ず其をして講じて、之を幼穉の時に習わしめ、其の習知と与に長じ、化・心と与に成つて而て扞格勝えざるの患無からんことを欲するなり。

とあるのを引いて、「小学」の決して「童蒙の書」にあらざる所以と、「広い意味において小学し

なければ、自分も世の中も救われない」ということを繰り返し力説している。（「小学の読み直し」）
他方、大人・聖賢たらんとする「立志」の強調、その熱烈な求道の情熱、激しい向上の気魄と知行合一を目指して止まぬ厳しい克己といった点において、安岡正篤は一貫して王陽明の精神をよく承け継いでおり、この点では世評に従って、氏を「陽明学徒」と評して差支えはないと思われるが、しかしいくつかの点において、その学問的立場は一般の陽明学のそれとは異なるものがあることは注意しなければならない。

但し、ここでは、朱王を分かつメルク・マールとされる「格物」に関する安岡氏の解釈の独自性を指摘するにとどめたい。即ち、氏の解釈は、早くから（『王陽明研究』以来）朱王折中にあった。同書二五四及び二五〇頁に、

畢竟「格物」を格（ただ）すと読むか、物に至ると読むか……学者は往々その一を執って他を排斥するが、深く考えてゆけば、両者決して一致せぬものではない。

とか、或いは

知識の問題から哲学的に論ずれば、ただすと読む構成論的見解の方が精密に相違ない。……しかしそういう認識論的な反省を離れて、知の本質を物我の関係から観れば、知を致すことは物にいたるにあるとして少しも差支えはないと思う。

といった把握をしており、これら両義を統一する立脚点はどこにあるかというに、それは後年一層明確となる、易学的世界観にあると見られ（同書二五四頁）、多少飛躍のきらいがあるが、

物に至るを科学的といえば、物を正すと読むは哲学的見解といい得ぬこともなからう。（同書二五五頁）

としていることは、後年の「立命の学」としての易学の、科学的側面と人間学的・哲学的側面の区

分に正しく対応するものと言えるであらう。

要するに、もし井上哲次郎の『日本陽明学派の哲学』が同じ著者によってその増訂版が出されると仮定したら、恐らく「折衷派」として安岡氏は分類されたであらうと思われる。

（青森県立野辺地高等学校教諭）

付 録

日本農士学校「学道箴規」

一 賢を尊び、道を慕ひ、恥を知る者入るべし。自負して信ならず、慚愧する所無きは容さず。

二 天下の為に心を立て、生民の為に命を立て、万世の為に太平を開かんとする者入るべし。徒に慷慨激越なるは容さず。

三 不遇をかこつべからず、一生安穩に道を樂しむを得ば足れりとすべし。凡そ大丈夫たらん者地下百尺に埋もる覚悟あらずんば大事を成すに足らざるなり。

四 道友は乳水の如く和合し、互に明徳を明らかにすべし。骨肉の敬愛すら異族に比すべからず。況んや学道の兄弟に於てをや。

五 礼を重んずべし。狎侮の交あるべからず。

六 人を責むべからず。毎に自ら省るべし。たとへ人を責むとも人を憎むべからず。

七 古より聖賢寸陰を惜み、高僧万縁を棄てし心を学ぶべし。半世を酔夢の中に過さば後悔臍を嚙

むとも及ばじ。尤も暮夜長く雑闇の巷を彷徨するが如きことあるべからず。たとひ出づることありとも、速に歸りて青灯の下古教照心すべし。晴昼閑あらば花木の栽培に力め、抱甕灌蔬すべし。

八 行往坐臥須く安詳なるべし。粗暴は学道の純熟せざるを以てなり。恥づべく、悲しむべし。

九 寮中力めて静座し閑に習字すべし。亦是れ治心の工夫なり。

十 寮中醉歌喧騒すべからず。又漫に声高く読書すべからず。総て無義の語、無慚愧の語を弄して興ずべからず。最も学道の累なり。